

# From Our Windows

川内倫子 | *as it is*

潮田登久子 | 冷蔵庫+マイハズバンド

アルル国際写真祭 アソシエイトプログラムへ参加



Untitled, from the series "as it is", 2020 © Rinko Kawauchi



Tokuko Ushioda From the series *My Husband* ©Tokuko Ushioda, Courtesy PGI

日本の写真表現を切り拓いてきた2人の写真家  
ここに出会い、「家」「家族」「日々の営み」をめぐる  
それぞれの思索が響き合う。

会期:

2026年 7月6日—9月20日 (会期中無休)

9:30—19:30 (7月6日—8月30日)

9:30—19:00 (8月31日—9月20日)

会場:

VAGUE (Arles)

住所: 14 rue de Grille 13200 Arles

セノグラファー:

小西啓睦 (miso)

# 展覧会について

「自分たちが覗き込んでいる世界を、作品を見ている方たちと共有できる。タイトルの「From Our Windows」も、そういう由来も含まれますね」

——川内倫子



「From Our Windows」は、2年前、「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2024」で開催された展覧会です。同祭への出展に際し、川内倫子は、自身より32歳年上の写真家・潮田登久子と展示空間を分かち合うことを選びました。異なる時代を生きてきた2人ですが、日々の穏やかなリズムに向けるまなざしには、どこか通い合うものがあります。

川内の「as it is」シリーズは、季節の風景に囲まれた家で過ごす娘の幼い歳月をたどりながら、誕生、成長、そして喪失の循環を、やわらかな視覚の詩として織りなしています。いっぽう潮田は、家族3人で7年間暮らし、アトリエとして40数年借りていた家を片づけるなかで見つけたひと箱の写真へと立ち返ります。1970年代から80年代にかけて撮影されたそれらの写真は、夫と生まれたばかりの娘と暮らした古い洋館のひと部屋での、日々の暮らしの節々を写しとったものでした。

対話するように響き合う2つの展示では、それぞれが大切に抱きとめてきた人びとと空間を介して、流れてきた時間の移ろいを思わせませす。京都であたたかな反響を得たのち、「From Our Windows」は2025年にジャパン・ハウス サンパウロへ巡回し、この夏にはアルル国際写真祭へと巡回します。アルルの街の中心部に位置するVAGUEで開催される本展は、KYOTOGRAPHIEにとってアルル国際写真祭のアソシエイトプログラムへの3年連続の参加となります。フェスティバルの国際的な広がりや、日本の作家たちを世界へとひらいていく思いも込められています。

# 川内倫子 | *as it is*

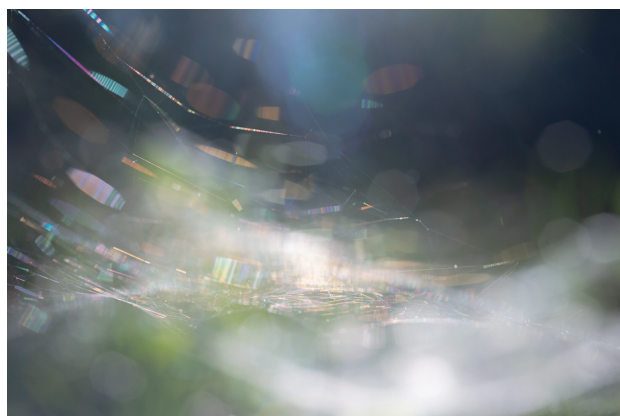
川内倫子は、ありふれた日常の一瞬を、簡潔でありながら崇高なものとしてとらえる表現によって国際的に高く評価されてきました。これまでに30冊を超える写真集を刊行し、生きものや風景、身のまわりの事物をめぐるつかの間の瞬間を写しとりながら、生と死の関係について思索を重ねてきました。

「*as it is*」(2020)は、川内の制作と私生活の双方において、大きな転機となるものでした。2016年、新たな命の訪れが、彼女のこれからを大きく変えていきます。「子どもの誕生は、それまで自分が歩んでいた道筋を大きく変えました」と川内は語ります。母となったことで、いのちのやわらかさと脆さの両方が、いっそう鮮明に意識されるようになりました。「これらの写真を誰かに見せようという特別な意図があったわけではなく、私はただ、家族の写真を一日一日、撮りためていきました」と川内は語ります。

2020年にフランスの出版社Chose CommuneとTorch Pressの共同制作により刊行された同名の写真集には、千葉の自宅を取り巻く豊かな緑の風景を背景に、娘の幼い日々を写したみずみずしいスナップが収められています。光の気配をとらえることに長けた川内は、澄みきった青空や草の葉一枚、降りたての雨粒を背に窓に張りつく小さなカエルといった、ごくありふれた光景のなかからも静かに美しさを見いだしていきます。



Untitled, from the series "as it is", 2020 © Rinko Kawauchi



Untitled, from the series "as it is", 2020 © Rinko Kawauchi



Untitled, from the series "as it is", 2020 © Rinko Kawauchi

「自分自身の懐妊、出産は最大級のインパクトでそれまで自分の歩んでいた道をスライドさせた。幼い子どもとの生活は大きな責務を負うが、その負荷を軽々と吹き飛ばす喜びと発見があり、それまで生きることにに対して積極的ではなかった自分を、生のほうへ向かわせた。

自分が選んだわけではない家で育ち、いまは自分の意思でつくった家族と生活をしている。それぞれの日々、どちらにも小さな静いがあり、ささやかな喜びを共有しあう時間があった。それらはまた移ろい、季節のように巡っていき、いつか娘も彼女自身の家族を見つけるのかもしれない」

——川内倫子

## 川内倫子



1972年、滋賀県生まれ。2002年に『うたたね』『花火』で第27回木村伊兵衛写真賞受賞。2023年にソニーワールドフォトグラフィーアワードのOutstanding Contribution to Photography(特別功労賞)を受賞するなど、国際的にも高い評価を受け、国内外で数多くの展覧会を行う。主な著作に『Illuminance』(2011)、『あめつち』(2013)、『Halo』(2017)など。近刊に写真集『やまなみ』(2022)「いまここ」(2023、谷川俊太郎との共著)がある。2022-2023年に東京オペラシティ アートギャラリーと滋賀県立美術館で個展「川内倫子:M/E——球体の上 無限の連なり」を開催した。

# 潮田登久子 | 冷蔵庫 + マイハズバンド

2019年3月、潮田登久子は家族3人で7年間暮らし、アトリエとして40数年借りていた古い西洋館の1部屋を整理していました。埃をかぶった洋服ダンスの奥から見つけたのは、忘れられていた1箱の写真でした。1970年代から80年代にかけて撮影されたそれらの写真には、夫と生まれたばかりの娘と暮らしした15畳ほどの1部屋で営まれた、つましい日々の暮らしが写しとられていました。

その写真の中心にあったのは、潮田が「シロクマ」にたとえた、古いスウェーデン製の冷蔵庫でした。それは夫がアメリカ軍基地で見つけてきたもので、3人暮らしの1部屋にはあまりに大きすぎました。けれど潮田はそれを疎ましく思うのではなく、代わりにそこへレンズを向けます。三脚に据えた6×6判カメラで、そのどっしりとした冷蔵庫を繰り返し撮影しながら、中に収められたものや扉に貼られた思い出の品々、そしてそのまわりに集う友人や家族の姿を通して、定点観測するように繰り返し撮影しながら、やがて関心を友人知人などの冷蔵庫へと広げていきました。ただただ淡々とそこに流れる時間をたどるように。

〈冷蔵庫〉とあわせて展示されるのが、〈My Husband〉です。ここでは、潮田の家族との暮らしが、いっそう親密な距離でとらえられています。写真家でもあるパートナーの島尾伸三、そして幼い娘とともに過ごした、一見すると何気ないひとときがそこにはあります。暮らしはいつも整っているわけではありません。雑然としたテーブルまわり、ふと始まる集まり、家族の手による散髪。そこにあるのは、ありふれた佇まいのなかに置かれた美しさと、飾り気のなさをたずさえた、まぎれもないひとつの家族のアルバムです。



From the series *My Husband* ©Tokuko Ushioda, Courtesy PGI

「くだらないもの、バカバカしいものを、  
笑って見ていただければいいと思っています」

——潮田登久子

「ただ懐かしいだけでは片付けられない、  
当時の気持ちに引き寄せられている自分に気づくのです」

——潮田登久子



Setagaya, Tokyo, 1983  
From the series *ICE BOX*  
©Tokuko Ushioda, Courtesy PGI



## 潮田登久子

1940年、東京都生まれ。1963年、桑沢デザイン研究所リビ  
ングデザイン研究科写真専攻卒業。同研究所で写真家・石  
元泰博、大辻清司の指導を受け、写真家の道に進む。1966  
年から1978年まで桑沢デザイン研究所及び東京造形大  
学で写真の講師を務める。1975年頃よりフリーランスの  
写真家。代表作にさまざまな家庭の冷蔵庫を撮影した『冷  
蔵庫／ICE BOX』、書架に在る書籍を主題とした『本の景  
色／BIBLIOTHECA』などがある。2018年に土門拳賞、日本  
写真協会作家賞、東川賞国内作家賞、2019年に桑沢特別  
賞受賞。2022年、写真集「マイハズバンド」がParis Photo-  
Aperture PhotoBook Awards、審査員特別賞受賞。

## KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭

KYOTOGRAPHIEは、日本の文化芸術都市として世界の注目を集める京都の町を舞台に、毎年春、臨場感あふれる写真の祭典を展開しています。単なる展覧会にとどまらない本フェスティバルは、伝統と現代が交差する特別な体験を提供し、来場者に京都の新たな一面を発見する機会をもたらします。また世界各地の多様な視点に触れる場として、新しい対話を生み出しているのです。

従来の枠組みにとらわれないKYOTOGRAPHIEは、革新的なセノグラフィー（空間デザイン）と綿密に設計されたインスタレーションで知られています。本フェスティバルが創出する体験は、展示形式の概念を覆し、鑑賞者が作品と空間をこれまでにない方法で体感できるよう導きます。これは、京都という特別な場所だからこそ生まれる、重層的な体験であると言えるでしょう。

KYOTOGRAPHIEは、人々を結びつけ、互いの違いを尊重しながら、多様なジャンルが交わる場を育むことを軸にしています。思いがけない出会いや発見が生まれる空間として、本フェスティバルは未来の可能性を探求しながら、創造し、解体し、再構築し、つながり直しながら、絶えず進化を続けることを使命としています。

[www.kyotographie.jp](http://www.kyotographie.jp)



## アルル国際写真祭について

アルル国際写真祭 (Les Rencontres d'Arles) は、1970年に写真家のルシアン・クレルグが設立。今年で56回目を迎える世界最古・最大規模の国際写真祭。KYOTOGRAPHIEにインスピレーションを与えた源泉としても知られ、古代ローマ時代の遺構など名所旧跡を利用した複合展覧会を中心に、才能・機会の発見や、異なる領域同士の交流など、その名の通りさまざまな「出会い」を求めて、世界中から写真家、キュレーター、ジャーナリスト、ファンが集い、写真と芸術の一大要衝地となっている。アルル・アソシエイトプログラムは、アルル国際写真祭の公式関連プログラムで、写真祭の来場者が写真に関連する文化的で多様なプロジェクトとアルルで出会える機会を創出しています。

<https://www.rencontres-arles.com/en>

**ARLES  
ASSOCIÉ 2026**  
LES RENCONTRES  
DE LA PHOTOGRAPHIE

## 会場： VAGUE

VAGUEは、ふたつの拠点をもつギャラリーです。ひとつは、日本の西部、山と海に抱かれた港町・神戸にある、1930年代築の旧銀行を生かした広々とした空間。もうひとつは、南フランスの古都アルルの静かな通りに面した、陽光に満ちた石造りの建物です。フランス語で「波」を意味するその名のとおり、VAGUEは、創設者・柳原照弘のデザイン哲学を空間として表したものでもあります。そこは、創造を生み出す「あわい」の場であり、新しい発想を試みるための場でもあります。展覧会、ワークショップ、フードポップアップ、素材研究、現代工芸、レジデンスなど、領域を横断する協働のプロジェクトを通して、VAGUEは日本と世界のあいだに新たなつながりを育んでいます。



©Yohan Nieto, KYOTOGRAPHIE 2025

## Press Contact

KYOTOGRAPHIE Office

〒604-0993  
京都市中京区久遠院前町672番地1

[www.kyotographie.jp](http://www.kyotographie.jp)

Tel. 075 708 7108  
Fax. 075 708 7126

中村葵 (Kyoto PR)

[aoi.nakamura@kyotographie.jp](mailto:aoi.nakamura@kyotographie.jp)

**KYOTO  
GRAPHIE**  
international  
photography festival

**ARLES  
ASSOCIÉ 2026**  
LES RENCONTRES  
DE LA PHOTOGRAPHIE